

下

Ichibun-no Ichi

#上ひさし

Hisashi Inoue

講談





講談社文庫

一分ノ一(下)

井上ひさし

講談社

〔著者〕井上ひさし 1934年、山形県川西町（旧小松町中小松）生まれ。上智大学フランス語学科卒業。放送作家としてNHK人形劇「ひょっこりひょうたん島」（共作）などで活躍を始める。'72年に『手鎖心中』で直木賞を受賞。'86年『腹鼓記』『不忠臣蔵』で吉川英治文学賞、'99年に菊池寛賞、2001年に朝日賞、'03年に毎日芸術賞をそれぞれ受賞したのを始め、数多くの賞を獲得している。おもな著書に『四千万歩の男』（全5巻）『ふふふ』『ふふふふ』『黄金の騎士団』（上・下）（以上、講談社文庫）、『少年口伝隊 一九四五』（講談社）、『東京セブンローズ』『ボローニャ紀行』（ともに文春文庫）、『イソップ株式会社』（中公文庫）、『一週間』（新潮文庫）、『初日への手紙「東京裁判三部作」のできるまで』（白水社）などがある。'10年に75歳で永眠。

いちぶん いち
一分ノ一(下)

いのうえ
井上ひさし

© Yuri Inoue 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年4月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277822-0

目次

第六章 白濁症の予防（原稿）……………

第七章 梅毒染病の防衛……………

第八章 淋病の予防……………

第九章 梅毒の予防……………

第十章 淋病の予防……………

第十一章 淋病の予防……………

第十二章 淋病の予防……………

附録 淋病の予防……………

下巻目次

第六章 白銀仮面の冒険しろがねかめん ぼうけん (承前) 9

第七章 長征菜館の決闘 26

第八章 決死の立稽古 77

第九章 秘密裁判 131

第十章 処刑まで 156

第十一章 犯罪心理研究所 239

第十二章 七人の音五郎 326

解説 未完が生む問いの先に 松山 巖 345



講談社文庫

一分ノ一(下)

井上ひさし

講談社

目次

第六章 白濁症の予防（原稿）……………

第七章 梅毒染病の防衛……………

第八章 淋病の予防……………

第九章 梅毒の予防……………

第十章 淋病の予防……………

第十一章 淋病の予防……………

第十二章 淋病の予防……………

附録 淋病の予防……………

下巻目次

第六章 白銀仮面の冒険しろがねかめん ぼうけん (承前) 9

第七章 長征菜館の決闘 26

第八章 決死の立稽古 77

第九章 秘密裁判 131

第十章 処刑まで 156

第十一章 犯罪心理研究所 239

第十二章 七人の音五郎 326

解説 未完が生む問いの先に 松山 巖 345

一分ノ一 (下)

第六章 白銀仮面しろがねかめんの冒険ぼうけん（承前）

しかし、この霊界ランドだが、こんな手の込んだ仕掛けをしたりして、いったい採算がとれるだろうか。他人事ひとごとながら心配になった。

「そして年が明けて、来春の二月四日、お主たちはそれぞれの御預け先で切腹を命じられるであろう」

筑波鉄郎という主任技師がいつていたように、お客をホログラム利用の三次元映像の中で遊ばせるというのであれば商売になるかもしれない。だが、これはホログラムではない。お客は、数十名の俳優ギヤランディの協力のもとで「前世」の自分を楽しむように仕掛けられている。俳優の出演料を考えに入れればとても引き合う話ではない。

「お主たちにも未来さきはないのだ。わかったか、ガハハハ」
ふたたび上野介こうずけのすけになりきってサブーシャは天井を向いて大笑した。

「いや、未来さきがないのは上野介殿だけでござる」

赤穂浪士の壁が真ま二ふたつに割れて、黒革の火事頭巾を冠かぶった中年男が登場した。黒小袖の下に鎖帷子くさりかたびらを着込んでいる。股引ももひきにも鎖が仕込んであった。袖印そでじるしは四寸幅の白布、黒塗鞆くろぬりざやの大小を差し、右手に朱色の柄の采幣さいはいを握りしめていた。

「ああ、あなたが大石さんですか」

「さよう」

「ご苦労さま」

サブーシャは小サ刀ちい がたなをほうり出した。

「すつかりたのしませてもらいました」

「いや、おたのしみはこれからでござる」

大石役の男は采幣を宙へ投げ上げると、からだを深く沈めながら大刀の柄へ手をかけた。そして目の前を落下する采幣へ横殴りに大刀を叩たたきつける。采幣は二つになつて地面に落ちた。

「もはや采幣は無用の長物でござる」

涙声である。

「こうして首尾よく上野介殿に御意ごいを得た以上、この采幣の役目も終えた」

「おみごと」

サブーシャは右手でVサインをつくって示した。

「この『前世』は受けますよ。きつと評判になります」

「上野介殿を最初に手がけたのはだれか」

大石役の男は赤穂浪士たちを見やった。

「間十次郎です」

若侍が一步前へ進み出た。黒小袖の上に袖無し羽織ばおりを着用している。背にはホラ貝、右手に短槍。

「槍の穂先が上野介殿のお尻に軽く触れた程度でした」

「それでもでかしゃった。お手前が上野介殿の御首みしるしをあげられよ」

「ははっ」

間十次郎役の若者の冠物かぶりものは革の鉢巻である。額ひたいに当る部分の中が広くなっている。

若者はその鉢巻をむしるようにして取って、目に押し当てた。若者も泣いているようだった。さすがにサブーシャはうんざりして、

「充分に前世を堪能しました。ときに出口はどこでしょう……」

と大石役の男に訊いたが、たちまち語尾が立ち消えになってしまった。大石役の男の顔は火事頭巾で、間十次郎の面おもては革鉢巻で半分近く隠されていた上、二人ともかつらを着用し、厚化粧をほどこしているからたしかないが、しかしどこか

で見たような気がしたのだ。

「御大将のお志こころざし、ありがたくお受けいたします」

「十次郎、仕損じるでないぞ」

鎖頭巾の男が十次郎役の若者から槍を預かった。鎖頭巾は十次郎の父の間喜兵衛を演じているらしい。

「臍下せいかに力をこめて大役をつとめるがよい」

「はっ」

若者はサブーシャの前へ歩み出て、すらりと大刀を引き抜いた。

「もと播州赤穂城御広間当番間十次郎光興みつおき、上野介殿の介錯かいしやくをつかまつる。さ、お支度めされよ。はばかりながらこの十次郎、腕にいささか覚えがござる。肩や背へ斬りおろし、お苦しみを引きのばすようなことはいたさぬ。すっぱり御首みしらしを斬ってごらんに入れますゆえ、大船に乗ったつもりで腹を召されよ」

「……豚足だ」

サブーシャは唇を噛んだ。

「四国ニッポン公安部の秘密工作員の豚足……」

心理学の初歩で習うルビーンの図形というやつだ。黒地に白抜きグライウインドの果物皿の図。普通に見ると、白抜きの果物皿が図柄フイギユアで、背景の黒地は地づらである。だが、「これは